

公開講座報告

「日本のテレビは何故北を向く？」 ーホームリビングと人間工学の新機軸ー

広報委員会 岩切一幸

2010年3月23日(火)に東京都武蔵野市の成蹊大学にて、一般社団法人日本人間工学会主催の表記公開講座が開催されました。参加者は、賛助会員が3社3名、学会員が29名、一般が16名の合計48名でした。以下に当日の講演スケジュールを示します。

13:00~13:15	オリエンテーション (財)労働科学研究所 酒井一博
13:15~13:30	テレビ視聴条件に関する簡単なアンケート、調査と実験の説明 成蹊大学 窪田 悟
13:30~14:30	テレビの画質評価に関する実験
14:30~15:30	テレビ視聴に関する人間工学的視点 成蹊大学 窪田 悟
15:45~16:45	魅力的な商品企画・開発のためのユーザーエクスペリエンスデザイン~ユーザー中心設計アプローチ~ 日本 IBM 吉武良治
16:45~17:00	実験結果の解説 成蹊大学 窪田 悟
17:00~17:30	まとめ

今回の講座では、人間工学の理解と応用などを実際に習得・体感して頂くために、参加者は被験者となって実験およびアンケート調査を体験しました。これらの実験・調査は、窪田氏からそれらの方法について説明後、早速開始されました。

■ テレビの画質評価に関する実験

実験は二つ行われました。一つは最新の液晶テレビ4機種に対する総合画質の一対比較実験でした。この実験では、3種類の映像からそれぞれ奥行き感、髪の毛・肌の質感、黒の沈み具合を、被験者が4機種のテレビに対して全対比較にて評価しました。もう一つは、



総合画質の一対比較実験風景

平均輝度レベル(ALL)が異なる2つの映像を用いて、液晶テレビのバックライトを被験者の好ましい表示輝度に調節する実験でした。この実験では、暗い映像(ALL 8.4%)と明るい映像(ALL 42.0%)ごとに、被験者は手元のツマミを回して映像を好みの輝度に調節しました。また、アンケートでは、ホームリビングのテレビの種類や大きさ、テレビを置いている位置、テレビが向いている方向などについて調査されました。

■ テレビ視聴に関する人間工学的視点

実験後、窪田氏が商品进行评估する際の主観評価方法やホームリビングでのテレビの使用状況、一般ユーザーによる液晶テレビの総合画質評価などについて講演されました。最近の液晶テレビの特徴は、映像の見やすさと省エネに重点が置かれているとのことでした。



表示輝度の調節実験風景



窪田 悟 氏

以下に興味深かった講演内容の一部を示します。

- テレビを見る視距離は、画面の高さの 3 倍が定性的に推奨されてきたが、調べてみるとそれ以上の視距離が好まれていた
- 日本や中国では南向きの窓が多く北向きにテレビを置くことが多いが、米国や英国では窓の向きもテレビの向きも一定の偏りはない
- テレビを見る時の照明の明るさも国によって異なり、日本では通常と同じ照明で見る人が多いのに対し、米国や英国では照明を暗くするかまたは消して見る人が多い
- テレビ画面の輝度は、高齢者が若齢者の 1.5~2.0 倍の高輝度を求める傾向にある

また、国内メーカー7機種種の液晶テレビを対象にした総合画質評価では、メーカー名は明かされませんでした。特に興味深かったのは、あるメーカーのテレビは、ある画像での評価が一番高かったのですが、別の画像では最低の評価になっていました。テレビは、視聴者がよく見るまたは見たい映像に合わせて選ぶのが、重要だと



吉武 良治 氏

感じました。

■ 魅力的な商品企画・開発のためのユーザーエクスペリエンスデザイン~ユーザー中心設計アプローチ~

吉武氏は、商品を企画・開発する側の立場から、ユーザー中心設計の必要性やその手法のペルソナ法について講演されました。最近では、技術の向上により実現できる機能や性能は、ユーザーが求めるものを上回ってきており、ユーザーが求めている商品を作りあげるユーザー中心設計が重要になっているとのことでした。ペルソナ法とはその手法のひとつで、ターゲットとする仮想ユーザーを厳密かつ具体的に設定して、その者を満足させる機能や性能を検討していくものです。適切な仮想ユーザー設定とその者を満足させる適切な提案が、実際の商品開発に大きく関わってくるとのことでした。



講演会場の様子

■ 実験結果の解説

その後、窪田氏から当日会場で行った実験・調査の結果が報告されました。表示輝度の調整実験では、明るい映像は暗い映像に比べ、低い輝度が好まれる結果が示されました。また、画像の総合画質の評価実験では、映像によって評価が異なること、また、必ずしも最新機種の評価が高いわけではないことなどが示されました。

最後に、本講座の企画者であり当学会「企業の人間工学教育のあり方検討委員会」委員長である酒井氏が、質疑応答を含めてまとめを行いました。まとめでは、人間工学は商品の企画・開発や評価などに有益なことからモノ作りに大きく貢献でき、さらには社会的にも貢献できるとお話しされ、終了となりました。今回は参加者体験型の新しい試みでしたが、長い時間を感じさせない楽しく、有意義な内容であったと思います。